

竜王北中学校 学校関係者評価書

令和8年2月16日(月)

(竜王北中学校) 学校関係者評価委員会作成

第1回 学校関係者評価委員会

実施日：令和8年2月4日(水) 15時00分～16時30分

会場：竜王北中学校会議室

参加者：(学校関係者評価委員)

石合廣光 田中陽子 米山徳彦 小尾裕子 川崎大成 葉袋圭一
(学校側)

青柳香 望月英宏 山岸江利香

I 学校側から提案された内容

- ・令和7年度自己評価書
- ・令和7年度自己評価シート集計結果

II 協議された主な内容

- ・令和7年度自己評価書に関する意見及び感想。
- ・本校の教育活動についての質疑とそれに対する意見および今後の改善策。

<学校関係者評価書>

I 全体評価

- ・肯定的な回答(A「とてもそう思う」B「そう思う」の合計)が、36項目中31項目で85%以上となっていることから、学校運営は概ね良好な状態にあると捉えている。
- ・肯定的な回答が低い(85%未満)項目は、以下の5項目である。
 - 1 学校は多忙化解消に努めている
 - 2 業務の効率化等の働き方改革を意識して職務にあたっている
 - 3 習得した知識・技能を活用する授業づくり
 - 4 ICTを効果的に活用した授業
 - 5 地域人材や施設を活用した教育活動

II 特徴

I・II 学校目標に関して、学校経営・学校運営に関して

○多忙化解消及び働き方改革について

- ・昨年度から行事検討や先を見越した予定づくり・安心メールの活用などを行った成果もあり改善点が見られるが、まだまだ改善の余地や個人差を縮小していく必要がある。
- ・今年度、校務支援システムの活用率が85%を超えているが、業務の質をさらに高める余地が残されている。来年度には新しい校務支援システムが導入されるため、これを単なるツールの入れ替えに留めず、組織的な業務改善の好機と捉える必要がある。
- ・働き方改革を進める一方で、不登校生徒への夕方の電話連絡や家庭訪問など、これまで「教員の献身」で成り立っていた部分をどう持続可能な形に再構築していくかが今後の重要な課題となる。

Ⅲ 学習指導について

○授業・家庭学習について

- ・ 学習の質を向上させる柱として「指導と評価の一体化」が重要である。今後も継続して教科部会を開催し、各教科の特性に応じた効果的な評価方法の研修・研究を深化させていく必要がある。特に、「竜北学習スタンダード」に基づく振り返りについては、単なる感想に留まらず、次の学習への意欲や自己評価につながる手法を模索する必要がある。
- ・ 教員による「個に配慮した指導」は定着してきているものの、一部の生徒が授業に十分な興味・関心を持っていないという課題がある。すべての生徒を授業に引き込み、主体的な集中を促すためには、発問の工夫や飽きさせない授業構成の研究が欠かせない。
- ・ ICTの活用は校内のみならず、家庭学習の充実にも寄与する。タブレットを用いた生活記録の継続により、教員と生徒が家庭での過ごし方や学習状況を共有しやすい環境を整え、さらに家庭学習の定着につながる事が大切である。

○ICTの活用について

- ・ 昨年度の校内研修を経て、ロイロノートを活用した授業や長期休業期間中の「生活の記録」のデジタル化など、ICT活用を行ってきた。しかしながら、活用の度合いは教員によって差があるのが現状であり、組織全体への浸透が課題である。

Ⅳ 生徒指導について

○いじめについて

- ・ いじめ対応については、定期的な生活アンケートを2ヶ月に1回に増やすことで、早期発見・早期対応を徹底している。その結果、認知件数は前年度から減少しており、取り組みの成果が表れている。
- ・ 生徒会が主体となり、生徒自身の言葉やアクションでいじめ防止に取り組む「生徒発の取組」を支援することで、生徒一人ひとりが当事者意識を持ち、互いの多様性を認め合える集団づくりを目指している。

○不登校について

- ・ 日頃の対面での観察や「生活記録ノート」を通じた双方向のやり取りに加え、遅刻・欠席の微増、提出物の遅れといった客観的なデータからも生徒の変化を読み取り、早期の気づきにつなげられるように努めている。
- ・ 「相談できる相手がいない」と感じている生徒の存在を、教職員一人ひとりが重く受け止め、日々の関わり方を常に見直し、誰一人として孤立させない地道な関係づくりを行うことが必要である。
- ・ 甲斐市教育委員会が示す「不登校取組リーフレット」の活用や、道德教育の充実を図ることで、生徒の心を耕す活動を継続している。
- ・ 家庭への連絡は、欠席が連続した場合や問題が発生した際だけでなく、学校で行った良かった・がんばった出来事の報告など、日常的な信頼の積み重ねを行うことが必要である。

Ⅴ 地域との連携について

- ・ 「地域人材や施設の利用」に関する評価は現時点では決して高くないが、各学年において特色ある教育活動が着実に展開された。1学年での福祉講話、2学年の職場体験学習、3学年の人権教室など、各分野の専門家や地域の方々を講師として招くことで、教科書だけでは得られない「生きた学び」を生徒に提供された。
- ・ 保護者との連携においては、今年度2回実施した「PTA 愛校作業」が大きな成果を上げた。

Ⅶ 創甲斐教育について

- ・ 「国語力の向上」がとても大切なことである。朝読書、長文の読み取り、書き起こすことなど大切な力だと考える。そのためにも読書を続けていくことが大切である。

Ⅲ 今後の課題として意識されたいこと

○いじめ・不登校について

- ・生活記録ノートの記述、提出物の遅れ、登校時の表情、欠席状況の推移などのデータを全教職員で共有し、第2相談室の活用や放課後の短時間の登校、オンラインの活用などを通じて、「学校内の誰かと繋がっている状態」を維持する取り組みを確認された。
- ・生徒会が中心となって行う「ありがとう郵便」を継続・充実させ、行事や日常のなかで、生徒同士がお互いの頑張りを認め合う取り組みを行い、感謝される喜びや自己存在感を育む取り組みとして継続していきたい。
- ・近年増加している通信制高校への進学や、長期欠席等を経験した生徒向けの「特別選抜制度」など、最新の入試制度を適切に情報提供する。また、3年生になり、進路を見据えることで登校意欲が回復するケースも多いため、一人ひとりの特性に合わせた丁寧な進路指導と背中を押す支援ができるようにする。

○授業・家庭学習について

- ・委員からは「昔に比べて授業を楽しんでいる生徒が多い」との肯定的な評価をいただいた。しかし、その一方で一部の生徒がいまだ学習に対して十分な意欲を持っていない現状を真摯に受け止める必要がある。また、生徒が答える「楽しい」がどのような質のものかを見極めることも必要である。
- ・本校の生徒には、自分の意見を述べることに苦手意識を持つ傾向がみられる。そのため、日々の授業に協働的な学習を意図的に取り入れ、自分の考えを話す機会を増やしていく。小さな対話の積み重ねを通して、自分の意見が受け入れられる成功体験を蓄積させ、生徒の自己肯定感を高めていきたい。
- ・近年スマートフォンやゲームの一日の利用時間が増加しており、家庭学習にも影響を及ぼしていると考えられる。改善策として、各授業での学びをアウトプットの機会につなげることで、学びの意義を再確認させ、自ら学ぶ意欲を高め、さらにそれが家庭学習の充実へとつなげられるようにすることが必要である。

○ICTの活用について

- ・学習効果を上げることや個別最適な学習を行うには、ICTの活用は極めて良い手段であると考えられる。デジタル化が加速する今こそ、教員は相互に連携し、ICTの強みを活かした柔軟な授業に取り組む必要がある。その過程で、対面指導による人間関係の構築や、手書きがもたらす思考の深化といったアナログの価値を組み合わせ、より質の高い教育を追求していくことが重要である。

○多忙化解消・働き方改革について

- ・行事の見直し・精査や「安心メール」の活用といった具体的な対策により、業務改善には一定の進展が見られたが、依然として業務量には個人差があり、さらなる効率化に努めていきたい。来年度は、新たに導入される「次期校務支援システム」の効果的な運用を軸に据え、重複作業の徹底排除を図り、システムを組織全体で使いこなすとともに、教職員一人ひとりが「生活の豊かさが指導の質を高める」という意識改革を継続し、持続可能な勤務環境の構築を目指していきたい。

※特記事項

- ・特になし

記載責任者（竜王北中学校 学校関係者評価委員長） 氏名：石合 廣光